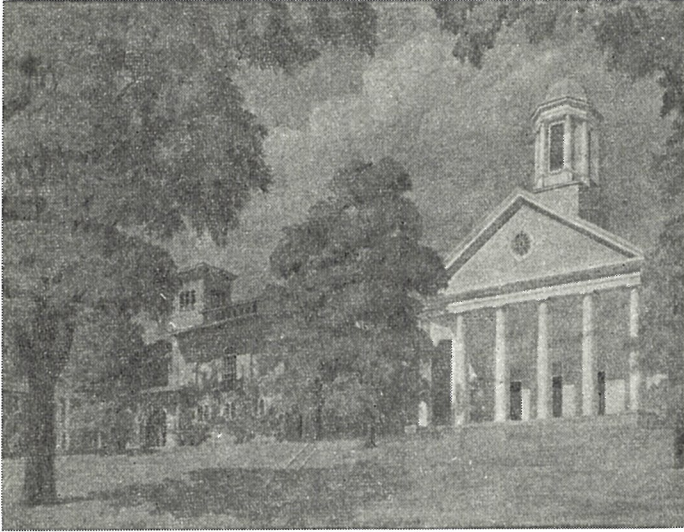


ある小さな大学

生島吉造



Little Three

小さな大学というと京都の種智院大学のことが頭に浮んでくる。今年の二月、この大学で行なわれた卒業式の模様が新聞紙上に報道されたが、卒業生の数が八名で、この式に参列した教員の数が三十一名であったという。まことに小さな大学で、マス・プロ教育が問題視されている今日、学生数については全く理想的な大学といえる。

米国の東海岸にある大学のうち、ハーバード、エールおよびプリンストンをBig Threeと呼ぶならば、ウイリアムズ、アーモストとウエスレアンはニューイングランドにある三つの小さな大学 Little Three と呼ぶことができる。手許にある“World Almanac”によると、米国の大学のうち、学生百名以下のところが三校。すなわち Institute of Textile Technology, Va. 一五人、Rochefeller Institute (Med.) N. Y. 六五人、Detroit Institute of Musical Art. 一〇〇人。まことに種智院大学の学生数に匹敵する小さな規模といえる。

米国では学士号を与える大学が約二千、学

生人口が六百万にのぼるといふことであるが、ウイリアムズとアーモスト両大学の学生数が一、一〇〇一、二〇〇名といえ、なんととっても小さい大学といえる。さて、アーモスト大学の創立は一八二一年。五年後には創立百五十年の祝典を盛大に迎えることだろう。

アーモストの学生数

三十年まえ、一九三〇年代、この大学の学生数はその施設の収容力から約八〇〇名に限られていた。第二次大戦以後、その学生数はだんだん増加して一九六〇年度には四〇年度に比べて二五%増、一九六一年度の後期の始めには一、〇二八名、六四年度には一、〇六五名となっている。

戦後、アーモストでは学生の定員の問題、ひいては大学の規模の課題について何回かの委員会が組織せられて、「小さな大学」の意義があらゆる角度から研究せられた。その主なものを挙げると、

(一)一九四五年 教授会による長期委員会は、「八〇〇名の学生数をこえてはならない」と報告。

(二)一九五五年 新計画委員会は「小さな大学の価値を保持するために、当時の在籍数、九六五名を認める。」

(三)一九五八年 大学の将来規模に関する委員会の報告。

(四)一九五九年 定員に関する理事の特別委員会が組織せられ、ついにその翌六〇年に、理事会は一年三〇〇名、全学一、二〇〇名の学生数にすること。しかも、この小さい大学が一、二〇〇名の定員にまで増加することは、アーモスト大学をより秀れた大学とするための第一歩であるとの確信をもって決議せられた。

まことに一、〇〇〇名の学生数を一、二〇〇名にわずか二〇〇名増加の結論にたつするまでには、五カ年の日時を必要とし、しかもこのためにこの大学の膨大な十カ年の基本計画がたてられることとなった。よい教育のためには十分な準備と計画を必要とするものである。

入学の選考

一般に「日本の大学は入学しにくい、卒業はしやすく、米国の大学は入学しやすい

が、卒業はむづかしい」といわれている。この表現は対句として妙をえて面白く、また、一半の傾向を示しているが、はたしてこう言いきれるものだろうか。

米国の大学の入学許可の条件として、嘉治真三教授はある大学の例として、「一つは高等学校の成績であり、第二は、全国的なアチーブメント・テストの成績、第三は紹介者である。この三つは、だいたい同等のウェイトで考慮され、入学者の選定が行なわれる」と紹介されている。

アーモストの場合、実際の入学選考の数字から判断すると、必ずしも入学しやすい大学と結論づけることはできない。一九六三年度、同大学を志望して入学の手続をした学生数は一六〇一名。このうちの二五・七%、約四人に一人だけが受理せられ、しかもそのうちの七三・三%だけが入学の許可をうけたと報告されている。いかえると進学希望者の中からその能力に応じて進学指導が十分になされた一六〇一名のうち、実際に入学できたものは三〇二名だけで、日本流にいうと入学の競争率は五・三倍ということになる。

選考の方法が異っているだけで、その入学

のための競争率は日本の場合と大差がない。日本の大学における入学試験による判定の方法と、こうした選考とどちらがすぐれているか、公平に比較してみたいものである。ここでもかなり多数の卒業生の子弟が、やはり入学できないことが訴えられている。

学生の成績

さてこうして入学した学生の成績はどうであらう。毎年十一月、この大学関係者はもちろん、ひろく卒業生一人一人に発表される「アーモスト大学理事会あての総長報告」という三十ページあまりの小冊子には、必ずこの千名あまりの学生の成績がくわしく報告されているが、私はいつも深い感動をもって読んでいる。大学がその教育すべき対象である学生の一最後の一人の学生にいたるまでの一精しい学業成績に注意を払っている事実にたいし、およそ教育はかくあるべきものと教ええられる。

たとえば一九六三年度は入学した一年生三〇二名のうち、学年末、成績優秀で修了したものの五七名、成績について注意されたもの七〇名、成績不良のため落第五名、退学したも

の一五名となっている。一年生全員の三〇%が、成績について注意をうけるか、落第ないし退学をしている。まことにきびしい学生生活であるといえる。

同じ年、後期の初め在籍していた全学一〇六五名のうち、学年末に退学したものの六五名。その理由の内訳はつぎのとおり。

- 二四名 個人の理由
- 一八名 成績不良のため
- 一一名 健康上の理由
- 五名 訓育上の理由
- 二名 転学のため
- 二名 不十分な成績のため任意退学
- 二名 兵役のため
- 一名 前期に卒業のため

今年の三月、日本の二、三の国立大学で、成績不良のため多数学生の留年が発表されたが、ここでは留年というより、むしろ退学が全体の七%あるということに注目したい。

さて、同学年における一年生の成績平均は七八・八七%、全学の平均八〇・一九%。この数字は明らかに上級生ほど成績が上位にあることを示している。

教授について

大学の建物は建てやすいが、よい教授はえがたいものである。フォード財団の調査によると、一九五五年全米の大学には約二五万の大学教員が在籍していたが、一九七〇年には三九万に増加しなければならぬと見積っている。一九五五年ごろでさえ、新しくPh.Dの学位をえた九千人のうち、教員志望のものは約半数で、しかもこの数だけでは必要人員をみたすことはできなかった。アーモストの場合でも、十年まえの大学案内にはPh.Dの学位をもった十人の自然科学系列の専任講師がいたが、一九六二―三年には三人に減少している。今日ではPh.Dの科学者が専任講師の待遇で大学に残ることがまれな例となりつつある。

さて、それにしてもこの大学における教員一人当りの学生数はきわめて少ない。教授一四〇名にたいして学生一〇六五名とすると、一対七・六の割合にあたる。

数年まえ、日本における私立大学の教職員と学生数の平均値が発表されたことがあったが、これによると学生数一万にたいして教員

二五〇名、職員二〇〇名という。いいかえると、教員一人にたいして学生四〇〇人、職員一人にたいして学生数五〇人という計算になるが、まことに雲泥の差という他はない。

教授の出身校別からその大学を評価することも興味あるものである。今日、ハーバード大学の場合、教授の任命にはなにか制限が加えられていないが、約三〇%が同大学の出身者であるにたいし、アームストは一九二九年、五四人のうち二十八人(五〇%)がこの大学の卒業生であったが、近來この比率は大いに變化して一四〇人のうちわずか二十六人(一九%)にすぎないという。学園のない大学の典型であろう。

アームスト大学の経費

1951	— 52	\$2,531,000
1961	— 62	\$4,973,100
1964	— 65	\$6,464,000
1971	— 72	\$8,567,000

さて、この大学における教授の担当課目と時間については、一九五〇—五一年度、約一二〇人の教授が二七六課目と、一〇四四単位時間(五〇分)を担当していたが、六一—六二年度には、一三八人が三三三課目と、一三三九単位時間を分担して

いる。この十年間に学生数には増減なかつた点より考えて、選択課目の数と、担当時間数が少し増加した傾向といえる。

教授の給与

過去十年間に米国大学の教員給与は改善されたとはいえ、他の職業が同様の技能にたいして支払っているものに比べると、給与は必ずしもよいとはいえない。一九六二年、医師の平均収入が年二四、〇〇〇ドル(八六四万円)であるにたいし、大学教員の平均給与は年一五、〇〇〇ドル(五四〇万円)であるという。最近数年のあいだ給与の改訂がなされたが、一九六一—六二年度の給与は一九四〇年当時の購買力と比べてわずかに改善されたにすぎないと報告されている。いいかえると一九四一—四二年度いらい、教授の俸給は二倍になったが生活費が同じく二倍になったといわれている。

それにしてもアームスト大学の俸給は米国大学のなかで一流に位している。米国大学教授協会は、アームストの全給与を、ベスト十位のなかに数えている。

大学の財政

プリンプトン総長が就任第二年目(一九六一—六二年)の報告には、この大学の財政規模があきらかにされている。日本における私学の財政的困難が論ぜられているとき、これら桁ちがいに大きい数字が、たんに海の向うの小さな大学の話として見のがしできないものがある。

この大学の経費は過去十年間に約二倍に上がったが、今後十年間におお七〇%膨張するところが予想されている。これを円に換算すると、一九六四年度の経費が約二三億一千七百万円にあたるが、学生数約千人として、一人当りの経費が二三万二千円になる。日米両国の貨幣価値の落差を考慮にいれても、まことに「よき教育には経費がかかる」ということである。

同年度における大学収入の内訳は、学費および学生の納入金は四一%、基金の収入三七%、寄付金および補助一二%、そしてその他一〇%。この比率は三十六、七年前のそれとは少しもかわらない。一九二八年の秋、同志社を訪問された当時のアームスト大学の理

事、キング氏夫妻は、岩倉校地にキング寮を寄附せられたが、そのころでさえアーモスト基金は七百万ドルで、その基金の利息が一年の歳入の七〇%内外、学費による収入は僅かの部分であると述べられている。今日でさえ、学費および学生の納入金はこの大学の全収入の三分の一にすぎない。いずれにしても学費を収入の大宗とする現在の日本の私大と大きな相違を感じる。

大学の基金

“World Almanac”の資料に（一九六一年六月現在）によると、全米の大学のうち基金二、五〇〇万ドル（九十億円）以上もっている大学の数は十四カ校。この「小さな大学」アーモストはその基金の額からすると十三番目で、二、八七三万ドル（約一〇三億円）。さらに最近の基金を時価に評価すると、一九六一年六月 五、一〇二万ドル

（一八三億円）

六二年六月 四、八六八万ドル

（一七五億円）

六三年六月 六、〇五五万ドル

（二一八億円）

六五年六月 七、四三四万ドル

（二六七億円）

そして一九六四―六五年度における基金よりの収入は約二五九万ドル（九億三千万円）で同年の収入の三五%に当たっているという。

なおこの大学は首府ワシントンにフォルガー・シエクスピア図書館を管理しているが、このフォルガー基金の評価額は、一九六三年現在、二五〇〇万ドル（九〇億円）で、この基金の果実によってこの図書館が維持運営されている。

基本計画

最初にのべたように、この大学の規模を定員千二百名に拡張するために、そして毎年新入生二百七十名のかわりに、毎年三百名をとるために、一九六二年、この大学の基本計画が発表せられた。そして創立百五十年祭を迎える一九七〇―七一年を目標に、三六〇〇万ドル（二九億六千万円）の募金計画が六二年三月から開始せられた。

このうち最初の三カ年間の中間目標が一、七〇〇万ドル（六一億二千万円）であったが、昨年六五年六月に、当初の目標を四一〇万ド

ル超過し、総額二一〇万ドル（約七六億円）の募金完了されたことを伝えている。

この二一〇万ドルのうち、九五%にあたる二〇〇万ドルの寄付は、寄付者（約五八〇〇口）の一〇%からなるものであり、全募金額の六〇%は、大口の十口の寄付により達せられた。また、この募金のために要した費用は全募金額の三・七五%、いいかえると、二一〇万ドルの募金のために七八万七千ドルがつかわれたことが報告されている。

私はいままで、この大学の膨大な基金と、なおその上に、七十六億円にのぼる募金が成功したことをのべてきたが、つぎのことばでこの小文を終わりたいと思う。それは「アーモストの募金計画の目標はお金を集めることではない。それはたんに手段にすぎない。その目標はアーモスト大学をつうじて、よりよいリベラル・アーツの教育を実現するにある」ということ。そしてこの募金計画のために、三カ年間に約二万五千人にのぼる米国のすぐれた頭脳と、最も多忙な人たちの時間が組織されて、一つの目標―よりよい「小さな大学」を充実させるためにつかわれたということである。

（本部庶務部長）

マスプロ教育と宗教教育

市川 恭二



時たま、所用があつて母校を訪れると、校舎や設備の増設・拡充は目ざましく、その点からは、たしかに母校の発展を、喜びたくなる。校友として当然の感情であらう。

しかし、掲示板の前に足をとどめる。夥しい掲示の中で、一きわ目立つのは、学生・教授・経営者のそれぞれの立場からの声明文・宣言文のたぐいである。それぞれに、訴え・叫び・罵り、中には白鉢巻で怒号するにも似た用語も多く、これが学校、それもキリスト教主義学校の掲示板なのかと驚かされる。何とも騒々しい限りである。相互に、尊敬も信頼も喪失したようなこうした環境で、およそ教育なるものは可能なのであろうかと、一瞬戸まどいを感じるのである。

昔の同志社にあつた生命とも本質とも考えられたもの——ひとりの卓越した基督教的人格を中心とした同志の集い、基督教信仰を背骨とした救国の理想、神を畏れる良心を基調とした高い倫理の精神、そうしたものが教育の根底をなして、全学に精神的交流と連帯感が存在した。こうしたものが、同志社

と呼ぶる特殊な伝統をなして、教育を通じて近代国家形成途上の日本に、大きく貢献した——すべてこうしたもの、危うくされていて、わが愛する同志社も、経営を第一とするマンモス大学の一つに転落しつつあるかに見られる。経営が・マスプロが、教学を建学の精神を、抑圧しているのではなからうか。回復の道を、どこに見出すべきであろうか。そして、その任務を誰が担うのであろうか。

二

昨年、いわゆる「人間像」の問題が、各方面でやかましく論議された。文部省関係から出された「期待される人間像」が、きっかけとなったことは言うまでもない。あれは、ずいぶん叩かれた。しかし、現代の日本で、しかも文部省の主宰で作られたものならば、あれ以上を求めるのは、始めから無理である。理由は明らかである。現代の日本に、民族的、国家的目標ないし理想と呼ばれうるものは、何もないからである。国・民族が目標と理想をもってこそ、教育の理念は確立するであろうし、その理念の具体化としての「人間像」

も必然的に成立つと言うべきである。現代日本に、「期待される人間像」の基盤となるべき目標のないことが禍いの原因であった。

聖書は違う。旧・新約を貫いて、人間は、神の主権の宇宙的確立のために寄与し、奉仕しなければならぬ。神の民は、そのために存在し、彼らの特権も喜びもそこにある、と言う明確な目標が示される。聖書に含まれている夥しい教訓・奨励のたぐいは、すべて、その焦点をここに持つと言ってよい。目標の確立のあるところ、また「人間像」も確立せざるをえない。

従来の日本の基督教的教育は、善良・温厚・親切な人格の育成と云うことを、当然の目標としていたように思う。「良心」も「愛」も、すべて個人の道徳の観点からのみ教えられたのではなからうか。その結果が、今みるような、悪いことをしない、個人的には尊敬できるが、どちらかと言えば、無気力・消極的な、従って大勢順応型のタイプが作られて来たように思うのである。もちろん、そこには良い面があって、社会に対して果して来た貢献をも大きく認めねばならないが、しかし現状打破や革新の力は、ここからは出て来な

いと思われる。教会と基督教主義学校の功罪は、この点、相なればするものがあるであろう。

現代、国内と国外とを問わず、地球上どこをみても、文明のひずみが様々な形の病的現象となつて、大きく人間性を歪め、神の子たるの尊厳性を傷つけ害つている。その不幸な犠牲者が、あちこちに、色々な形でもがいている。こうした悲劇的な時代に、自分だけ幸福・平安であることに咎めを感じないのは、非良心的であると言うべきであろう。そうでなくて、相手の身分・階級あるいは宗教・国籍のいかんを問わず、そうした不幸な人たちの所に近よつて、手を貸し助け起こそうとして働らく「善きサマリヤ人」(ルカ福音書十章)の人間こそ、神を愛し人を愛する、真に良心的な愛の実践者であつて、かかる「人間像」こそ、現代の教会や基督教主義学校から高く打出されて然るべきであろう。それはまた、「良心を手腕に」と教えられた創設者の精神を現代に生かす道でもあろう。

四年前、米国からの帰途、南米から欧州・アフリカ・中近東の諸地域を視察する機会にめぐまれた。その途上、空路で日本の商社関

係の人々と乗合せたことが、しばしばであった。聞くと、セールのためにアフリカの奥地にも行くと言うことであった。日本人の商魂のたくまじさに感嘆したが、それ以来、「商人国家・日本」という言葉が、私の脳裡を離れなくなった。

それを悪いと言うのではない。しかし、世界の隅々を「儲けてやろう」という目で見た日本人の行き方には、世界各地で、批判や悪評が起っていることは、周知のことである。この調子でゆくと、かつてその武力で、世界中から憎まれたわが国が、こんどは経済力で、世界から憎まれたり怒まれたりする日が来ないであろうか。それは別としても、たとえば、隣国の戦争と流血を種にしての儲けや繁栄によつては、日本民族は、決して祝福されないであろう。

日本民族のもつ優れた能力で、世界の隅々を、助けよう・奉仕しようという目でみる——こうした精神が我国の多くの青年を動かすようになったら、すなわち「商人国家」から「奉仕国家」への転換が行なわれ得たら、日本は世界から尊敬され、日本自体も祝福されるであろう。

こうした民族・国家の目標と理想は、基督者によつて打ち建てられねばならぬ。教会と基督教主義学校が、協同でその使命を担わねばならぬ。それが聖書を現代に生かし、同志社の使命を現代に遂行することであろう。ところで、現在の同志社の中で、そうした任務は、どこで、また何人によつてになわれているのであろうか。

三

学生諸君に訴えたいことがある。カンニングの問題である。最近ある教会に、多くの学生たちを前にして、君たちの中で、自分の学校には、カンニングは絶対に行なわれていないと言っている人があつたら挙手して下さい、と言つてみた。唯のひとりも、手をあげなかった。それをみて、私は、カンニングは日本の大学と高校をなめつくしているのではなからうかと思つた。

わが国では、選挙の度ごとに、公明選挙が鳴物入りでうたわれるが、選挙の不正は、年と共に根を深めてゆくようである。こうして、単に政治の世界のみならず、社会の到るところで、不義と不正が横行することとな

る。不正・不義とは、要するに「カンニング」である。学生時代にカンニングの味をしめた者が社会に出て、より強い競争に勝つて生き残るためにさまざまの形のカンニングを、やらない筈がないとみるのが正しいであろう。学校のカンニングを根絶することが、社会的正義樹立の先決であり、根底であると考える。

試験場に、いわゆる試験官が二人も三人も来るとするのは、学生・生徒はカンニングをする者だ、という認定を前提とするからである。こんな侮辱があるであろうか。学費の値上げや自治の貫徹のために、ハンストをさえ決行する若者が、どうしてこの侮辱に対して無関心なのか諒解に苦しむのである。先生は試験問題を配り、二、三の質問に答えたら、どうぞお引取り下さい。あとはわれわれが自主管理を致します。カンニングは、絶対にやりません、やらせません。こういう運動も全学に展開することは出来ないであろうか。同志社なのであるから、このことが全国にさきかけて行なわれてよいと考える。日本の大学・高校にこれが徹底したら、日本の社会、日本の民族精神は、どれほど浄化されるであろうか。それが、基督教主義学校のなしうる

偉大なる貢献なのではないであろうか。

四

戦後の学生の性格の変化ということが、特に最近、東西で瀕発する学生活動を契機に、絶望的な嘆息をまじえて語られることが多くなつた。私も同感しないわけではない。けれども、その中には、現状を否とし、あるべき姿への回復を強く願っている青年学生も、少数ではあつても必ず存在するのである。いわば「バアルに膝をかかめざる」「残りの者」である。昨年、新島記念懸賞論文で一等当選した徳永さんという女子学生は、私の教舎の舎員である。同志社に入学して始めて新島先生を知り、その人格と識見とにひかれ、みずからも基督教精神による教育に生涯を捧げたといふの念願を持つようになったのである。現状の無秩序・混乱に悩むだけ、かえって高く純な理想を追求する情熱が盛んとなる。これも、案外気付かれていないが、しかし現代青年の特質の一つに数えてよいのではなからうか。

問題は、バアルに膝を屈めぬ、そうした学生を、どうしてつかみ、どのように導くかで

あろう。

私の同志社在学は、昭和十年から十五年にかけてであつたが、その頃は堀貞一先生が二にも新島、二にも新島、とに角、ひとりで新島先生を叫び、新島先生を伝えていられた。口の悪い神学生は、堀先生のは、福音をではなくて、新島先生を伝えているのだ、などと言つていたが、今から想つても、なつかしい思い出である。貴い堀先生のお姿であつたと思う。あの頃の同志社は、ひとりの堀先生によつて支えられていたのではなからうか。

バアルに膝を屈めない七千人を呼び起したのは、ひとりの予言者エリヤであつた。この「ひとり」が精神運動の原動力として、限りなく重要であり、また、貴いのである。この「ひとり」から、絶えず起る発振によつて、周囲に共鳴者・協力者があらわれる。不動の確信をもち、現代に適用すべき高い理想を掲げて進む者には、それが真実のものであれば必ずこの事が起るのである。もちろん、抵抗も反対も、無関心も冷笑も避けることは出来ない。しかし反対を受けることが、かえつて、その真理たることを立証する場合もある。困難ではあるが、しかし、同志社を思う

ならば、日本の救いを願うならば、この十字架を誰かが負わなければならぬ。

私は、同志社は「同志」社でなければならぬように思う。現代の日本に、同志社が絶対必要であるとの確信を持つ同志たち、その「同志」社は、絶対に聖書を福音信仰に立たねばならぬことを確信する「同志」たち、そして、同志社の現状を、自分の責任、自分の罪として、かつて新島先生がそうされたように、あえて、自分の身を鞭打とうとする同志たち。これらの人々によつて支えられる同志社こそ、その生命を回復し、日本の救済に一翼を担うものとなりうると考える。そういう人々が、現在の同志社、その経営者の中にも、教職員、学生の中にも、決して少くない筈である。

誰が、十字架をもつて、バアルに膝をかかめぬ七千人を呼びさますべきエリヤの役を果たすかに、同志社の将来がかかつているのではなからうか。

(校友・大阪教会牧師)

大学教育の反省

河野 仁 昭

1

数年前のことだが、ほくは一学生の自殺事件にかかりあつた。かわりあつたという表現は適切でないという気もするが、どう表現するのが妥当であるか、いまもよくわからない。

同志社大学では、入学式直後の一週間を、その学年度に聴講する学科目の登録期間としており、学部によって若干のちがいはあるが、その期間内に登録しなかつた学生は、就学(修学)の意思がないものと判断して、一定期間様子をみたのち除籍の処置をとる。

ある程度の期間をおくのは、登録期日を失念している者や、病气や事故で、本来はその

旨を届けざるべきなのに、届けをしないうまま所定の期日に登録できないような学生を慮つてである。

その期間に学部事務室では、電話なり手紙で未登録学生に連絡をとり、意思をたしかめ、早急に登録するよう督促するのである。そういう学生は毎年かなりの数にのぼり、あたふたと手続きにくる者もあれば、本人は就学の意思を喪失して父兄が相談にやってくるケースもある。昔も沙汰もない学生もいる。

自殺したのは、右のような未登録学生の一入人であり、彼は電話連絡に応じて事務室へきた。彼が死んだのは、それからわずか一週間ばかりのちのことだったと記憶する。

数日後、死亡退学届をもって彼の父親がき

た。ノートのきれはしに「お父さんお母さんすみません」とだけ走りかきた一通の遺書があつたきりであり、友達もいない子だったので、家の方では何故死んだのか皆目見当がつかない。学校では何か原因について心当りがないだろうか。来年の三月には卒業するので、早てまわしに知人にたのんで就職口も決めてやつてあつたし、本人もその就職先が気に入っているふうだったのに——、と父親はいつた。そのとき、ある衝撃が胸をつき抜けるのをぼくは感じた。

呼びださなければ学科目の登録手続きにも来なかつた彼の過去三カ年の取得単位では、来年三月の卒業はおろか、あと二年間精いっぱい努力してさえ卒業はおぼつかないであろ

うと思われるような状態であった。そのことを彼は、家族にはまったく知らさず、ましてや就職口まできめてしまった父親にむかっては、うちあけることができなかったのだ。

ぼくは彼を呼び出したとき、いちおうの事情はきき、あきらかに就学については消極的な姿勢が認められる彼に、しかるべき助言をあたえ登録するようすすめ、手続きをさせて帰したのである。

さきに言ったように、所定期間内に登録をしない学生は沢山いる。彼はそのなかの一人であり、多数のなかの一人としてぼくは応対し、彼のためになるであろうと考えてぼくは応対し、手続きをさせたのである。そのかぎりにおいては、ぼくは懇切だったつもりであり、決して煩をいっとたわけではなかった。

だが、ぼくの自責なり悔いは、もっといえば自己嫌悪の禍根は、やはりその点にある。ぼくは簡単な応対ではあったが、彼がまだに大学という環境にうまく適応することができず、かなりつよい違和感をいだいているのを感じた。単位修得のおくれも、就学にたいする消極的な姿勢も、原因はどうやらそこにあるらしいと感じた。しかし、ときどきある

ケースのひとつだという程度において感じたにすぎなかったと思う。

もしもそのとき、ぼくがもう一歩ふみこんでじっくりと応対し、問題を十全に把握しようとしたならば、つまり、担当業務の枠と意識をみずからの内部で超えていたならば、ぼくはもう少しがあった処理を、彼のためにしたであろうと思う。しかるべき人々に相談をもちかけたであろうし、家族にも連絡をとったであろう。すなわち、一人の学生を死にいたらしめることのない処理なり対策が、可能であったかもしれないのだ。

また、ある年の夏、岡山地区の父兄会の席で、入学したばかりの子供が大学にひどく失望して帰ってきて、いくら言ってもきかせても行こうとしないのだがどうしたものだろうかという苦情と質問を、学生の母親からきかされて愕然としたこともある。

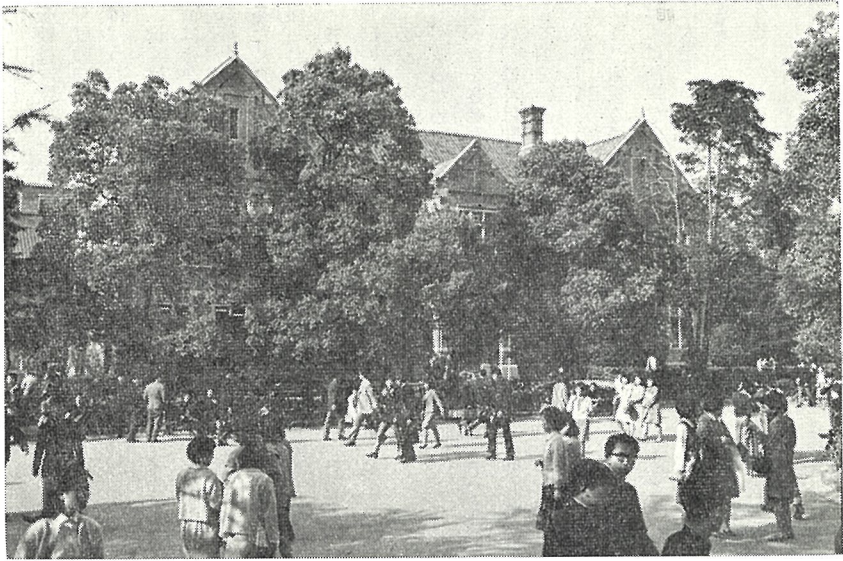
こうした体験は、数えてみるとかなりの件数にのぼり、そして、そのひとつひとつが学生の生涯に、場合によっては生死の問題にかわりかねないのだということを、ぼくは否応なく認識せざるをえなくなっている。

2

右のような、いわゆる問題学生にたいして、現在の大学は、いかなる組織が、あるいは人が、彼らをうけとめ、問題を把握し、適切なアドバイスなり対策を講じてゆく体制をしいているだろうか。

なるほど、学生部には不十分ながらカウンセリング・センターがあり、各学部には学生主任なり教務主任がいる。しかし、カウンセリング・センターなりしかるべき教員や、演習とか外国語の担当者に、そして事務室の職員に相談をもちかけてくる学生は、大なり小なり問題を自主解決しようとする意欲をもっているのである。だからこそ相談にもやってくるのだ。なんらかのクラブに所属し仲間をもっている学生についても、ほはおなじことが言えるだろう。

だから彼らについてはさして問題はないというのではない。全学生をいちおうの対象として、真剣にぼくらは考えてみる必要があるのだ。一体、大学のなかの誰が、あるいはいかなる組織なり機構が、学生一人一人をかくがえのない一個の人格として、トータルなう



けとめかたをしているか、うけとめてやっているかを――。学部による差はあるだろうが、ゼミナールにさえも所属できず、あるいは所属してはいてもいつの間にか脱落してしまう学生はおびただしく存在する。もっとも問題性があるのはあきらかに彼らであるにもかかわらず、彼らは大学内の誰からもほとんど理解されず、気軽に相談に応じてくれる人を、あるいは話しかけてくれる人をもっていないのである。

あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。（ルカによる福音書 第十五章）

ほくらは、はたして捜し歩いているであろうか。迷える小羊は誰からもかえりみられずにさ迷い続

けており、その数は年々増加の一途をたどっている。そのうちになんとかなるであろうなどという悠長な問題ではないのだ。

3

早稲田大学の紛争(?)を契機に、私立大学が内包している諸問題がさまざまな角度から分析論評され批判され、国立大学と比較された。いや、それ以前から種々論じられており、特に今年は永井道雄教授によって、「おそらく『大学の年』になるであろう」(『読売新聞』一月五日)などとも言われていた。今年にかぎられる問題なら、まだしも救いがあるであろう。

それらの諸論文なり見解に、なんらかのものをつけ加え、または私学人のひとりとして反論するだけの用意はほくにはない。ただ、釈迦に説法のそしりはおそらくまぬがれぬであろうが、みずからの乏しい体験にもとづいて、ただひとつだけほくは言いたい。大学は、学生を量ないしは数として把握し認識しようとする態度を、極力排すべきであるというところを、学生の量の把握こそまさに、マスプロ教育の端的な顕現であり、さまざまの弊害、と

くに学生問題をうむ大きな要因なのである。

理事および財務担当部門は、あるいはそうした分野のスタッフは、経営的観点から学生の数を問題にせざるをえぬであろう。教授会は、いちおうは数学的観点から入学者数を論議決定するといえ、経営上必要であるといわれる数に大なり小なり拘束されるであろうし、板挟みのジレンマをいかんともないがたいであろう。さらに、膨大な受験者数を短時間で処理し、合否を決定しなければならぬという現実的な必要性から、いきおい量的把握に傾かざるをえぬであろう。各事務組織は、それぞれの担当業務について、その量をいかに能率的合理的に処理するかの方策を考え、遂行努力をはらうであろう。

それをとやかく言うのではない。問題は、教員職員あるいは各層なりパートに、学生を量あるいは数として把握し認識しようとする態度が露骨にみとめられ、そうした認識なり態度を、誰もさほど疑おうとはしないことである。学生の自殺を知らされて、「ほう またか——」というふうにはくらは反応しないであろうか。そうした反応こそ量的把握の端のなあらわれでなくてなんでであろう。恐ろし

いことである。

なるほど、現状やむをえぬ問題は多々ある。新島淳良早大助教が指摘しておられるとおり、大学生の七割をかかえている私学の研究・教育の条件は、国立大学とは比較にならぬほど劣悪であり、『現代の眼』四月号、現実の問題としては、授業料値上げか学生的大量入学への方向をとる以外に、現実的具体的な改善策はない。しかし、多くの学者や新聞論調で指摘されたように、右のような手段で条件の整備向上をはかることには一定の限界があり、すでにその限界に達しているともいえる。かといって、深代惇郎氏が詳細なデータをあげて言っておられるように、私学への国庫助成をとなえてみても、要求がそのまま実現されるであろう可能性はきわめて薄い。〔自由〕四月号)

4

しかし、現状を容認するわけにはいかないばかりは、外にむかって訴え、その訴えを組織してゆくとともに、みずからの責任において現状をいささかでも打解するための創意と、精いっぱい努力をつみ重ねる必要があ

るだろう。よしんば改善の方策であろうと、現状打解のためにはあらゆる実践努力が、私人人自らによってはらわれねばならない。

いたずらに外観の美や偉容をきそいあう私学経営のあり方は、あきらかに問題である。ましてやそれが膨大な借入金によってなされているのであるから、なおさらのことだ。質素な校舎は校舎として認可しないなどという規程があるわけではない。私学には「計画があつて経営がない」(『自由』四月号)という深代氏の指摘は、あなたがち具体的内容を知らぬ者の批判にすぎぬとして片付けてしまえないものがある。他ときそうなら、大学本来の使命である研究と教育の内容で、質で、レベルできそおうではないか。その覚悟をもとうではないか。新聞や雑誌の投書などからもおおよそ察知しうるように、大学は何によって評価されるべきであるかの基準を、世間はけつて見失つてはいない。大学はホテルでもデパートでもないのだ。

大学には現実には、一万五千余名の学生がいる。大教室には千名にちかい学生が詰めかけている。学部事務室はそれぞれ三千名にちかい学生に接し、日常業務を処理しなければな

らない。出納課しかり、学生部しかり、就職部またしかりである。むろん教員も例外たりえない。

しかし、一万五千名いようと二万名いようと、それは、性格も環境も能力もそれぞれ異なる一人一人の学生の集合体としての数なのだ。各人の個性を個性においてうけとめ対処し、血のかよった人間関係をうちたてる姿勢と愛情が、そして実践努力が、教員はもろろん、経営層にも、事務組織の活動を日常的にささえている事務職員にもっとなければならぬ。学生を量あるいは数として、意識的無意識的に把握しようとする態度を謙虚に反省し、一人一人をかがえのトータルな人格としてうけとめ、共感的理解につとめる姿勢と努力を欠いではならない。

姿勢や態度が万能だということではない。もっとも必要な姿勢が欠けていることが問題なのだ。古風な精神主義だとか、単なる理想論だとか、労働条件の改善につながる等々の反論は、おそらくあるだろう。だが一蹴してしまわれるまでに、現状をもってよしとしないのなら、現実それがどこまで可能か、どのような具体的方法があるかを、是非いちど検

討してほしいと思う。より多く心がまえの如何にかかわることであって、それほど労働条件の改善をとまわずに可能であるとはよく考える。

たとえば、個々の学生をとらえるための綱の目を組織することは、さほど困難なことではない。教員と職員がより具体的にその目的のもとに提携することであり、全組織が有機的な統一体として運営され、より有効にその機能を発揮することなのだ。そうなれば、どこでキャッチされようと問題学生はしかるべき人なり機関あるいは組織へ伝達され、しかるべき処置が講じられるであろう。それは、明日からでも可能な、そしてもっとも有効な対策であるとはよく考える。もしもそうした網の目が組織されていたならば、早大紛争において教員の不在がいわれたような事態は、おそらくおこらないであろうし、紛争そのものの性格なり収拾も、もう少しちがったものになっていたのではないかと思われる。

5

出席率がわるい、勉強する意欲をもった学生が少ないといった嘆きを、教員からしばし

ばきく。理事や教職員から「暴徒」よばわりをうけた学生もいる。問題は数えれば際限がないであろう。だが、どのような学生であれ、彼らはすべて、大学が入学を許可した、つまり教育する責任をひきうけた学生ではないか。そして、ぼくらは実質的に入学の許可をあたえた学部教授会の責にのみ問題を帰してはならないのだ。教授会の責任だといって済ませるなら、教授会以外の大学における組織・機構は、一体いかなる目的を実現するために設けられたものであると考えればよいのか。

すべての学生は、かけがえない一個人の人格であり、そして彼らは、自己成長をとげようとする本能と可塑性をもった青年なのだ。だからこそ問題もおこすと同時に、教育が可能であり、それを必要とするのである。

全教職員と組織が、学生一人一人と常時接触し、共感的理解をもとうとし、全人格的にうけとめ対処しようとする姿勢と精神でつらぬかれ、不断の努力が継続されているか否かが、現在の私学がおちいつているマスプロ教育の弊害を克服する、唯一の、とまでは言えなくとも、おそらくもっとも重要なキイ・ポイントであろうと考える。

(大学職員)

欧米の大学教育 (一)

三 輪 輝 夫

西部の大学

西部の大学は「伝統」と「学風」を育てつつある。視察した諸大学のうちスタンフォードが一八九一年、バークレイが一八六八年、南カリフォルニアが一八八〇年と、州立のバークレイ「University of California Berkeley」が一番古い。東部ニューヨークの諸大学ハーバードは一六三六年に比べると、アメリカでは新しいのである。

キリスト教精神を基盤とした自由、個人の尊重、隣人愛、これはアメリカの大学教育における精神的な基盤であることは言うまでもないが、西部の大学にはこの上にフロンティア精神が一枚加わっている。例をスタンフォードにとって見よう。

スタンフォードの校章は「A Tall Tree」

である。サンフランシスコ・ベイを発見し、その地域を開拓した「ガスパル・ド・ポルトーラ」の最初のキャンプをとり囲んだ、百フィートのレッドウッド（アメリカ杉）の群れその名残りは今もスタンフォード・キャンパスに幹だけ残っているが、この千年の樹齡を持つ「Palo Alto」は偉大な大学の持たねばならない、力と独立と耐久性とを表象する、と説明されている。校章にはなお「Die Luft der Freiheit weht」――自由の風が吹く――という十六世紀のドイツ詩人の句が刻まれている。「真正の大学の真正の道」とは、古い真理に対して質問する自由だ。そのことは未知の世界にさぐり針を入れることであるという意味が、この「President's Seal」の説明において特に強調されている。

やっつこう重々しい校風を踏まえて、学

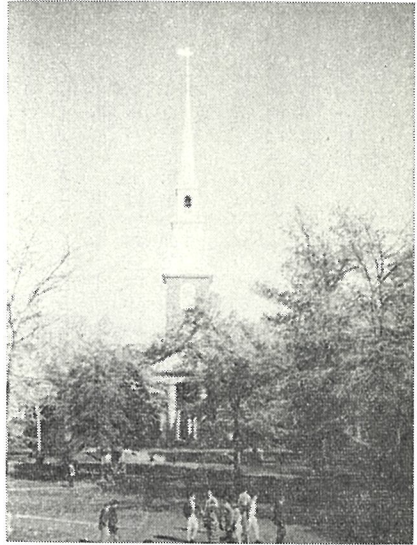
生に対する精神的な訓練はどうなっているだろうか。スタンフォードの学生規範は「基準」^{*}「Fundamental Standard」、^{*}「自尊律」^{*}「Honor Code」に分かれている。「基準」とは単なる規則ではなく、「人間形成における誠実性の感覚を深め、かつ、学生の自尊心を高めること」を目的とする道徳律であり、学の内外において、秩序、道徳、個人の尊厳、善良な市民としての第三者の権利を守る等々のことが学生の本分であることを教えているのである。

「Standard」とは学生の教養の到達すべき水準を示すもので、規則ではないという考え方は賞讃に値する。

◎試験場には監督が配置されていない。

◎学生は「スタンフォード大学生連合」A

SSUを持つ。



ハーバード大学メモリアル・チャーチ

学は緑の牧草原と古い檜の木
林にかこまれ、そのまん中に三
五個のベルを持つフーバー・タ
ワーが王様のようにそびえ立
ち、その足下にスペイン風のアー
チを持つ古典的な校舎が侍っ
ている、という先ずは理想的な
アカデミック・キャンパスであ
る。

十月五日、午前中のディスカ
ッションで、事務局長 “Exe-
cutive assistant to the presi-

◎ASSUは自治組織―立法、行政、司法―
を持ち、「基準」と「自律律」を自ら守る。
非常に短い説明であるが西部の代表的な私
学、スタンフォードの学風とこれに対する学
生の立場を御理解願えると思う。

サンフランシスコの南方約三十哩の位置、
太平洋とサンフランシスコ湾の中央に坐って
いるパロ・アルトは、東方に鬱蒼としたシェ
ラ・モレナ山を控えた気候温暖の地である。
八四〇〇エイカーという途方もないひろさの
なかに、八つの学部 “Schools”、一〇六八九
名の学生、一二五名の先生を擁するこの大

dent”のグローバーさんに、経営と教学の平
和共存について突っ込んだ質問をして、七三〇〇
万弗（二六三億円）のでっかい予算にもやは
り悩みがあることを発見したり、スチューデ
ント・ユニオンでのレセプションで、数年前
大学経営セミナーで秦理事長や大江就職部長
をしいた経営学者のニールセン博士と専門
外のAVR教育について論じたり、充実した
一日を送ったのであったが、ブック・ストア
でスタンフォードのペナントを選んでいるう
ちに、一行とはぐれてしまった。このだけだっ
広いキャンパスで車なしにうろついては一大

事と、ともかくブック・ストアの娘さんに、
“I’m lost, where shall I go?”と質問に及
んだ。ところが実に頭の回転の早いこの学生
アルバイトらしき娘さんは、即座に「ミセス
バーバラ・ギヴァンに会え」と教えてくれた
が要するに彼女はミセス・ギヴァンが赤毛布
訪問者のプログラム編成担当者であること知
っていたわけである。ただし、いかに迫りつく
かは向うの「スチューデント・ユニオン」を通
り越して、中庭の辺りでまた聞いてくれとい
う挨拶であった。おかげさまで私は一人でス
タンフォードのキャンパスをぶらつき、ベト
ナム問題を語り合う学生たちのエキサイトし
た、しかし他の学生たちをみださないグルー
プ討論を立ち聞きたり、音の図書館のレコ
ード貸出風景を見学したり、ユニオンの中庭
でキャンパスチェアに寝そべて日向ぼつ
こをしている可愛い女子学生と問答したりい
ろいろ余分な見聞を得ることが出来た。

特に、ミセス・ギヴァンの紹介で、人事部長
“Director of personnel” ショセフ・スロッグ
スさんと一対一でアメリカ、日本の大学につ
いて長時間語り合うことが出来たのも、迷子
になったおかげである。その代り行方不明

の間、一行の人たちにはどうやらたいへん心配させたらしく、十五人を三班に分けて、班長責任制度がつくられたのは誠に余儀ない次第であった。

東部の大学

@先づハーバードについては、ハーバード大学のあるケンブリッジは人口十萬の都会で、ボストンとはチャールズ河を距てて、相對している。文芸と科学の中心地として古くより有名であり、同じ河の流れにのぞんでマサチューセツ工科大学 "Massachusetts institute of technology" があり、つらにハーバードのキャンパスに續いてハーバードの女子部と呼んで差支えない、ラドクリフ・カレッジがある。

ハーバードの中心をヤード "Yard" と呼ぶ。ここは創立時代には、ハーバードの全部であった。ヤードとは、普通に英語では「囲い」であり「庭」である。しかし特にハーバードのそれは創立当初にキャンパスとして購入した一エーカーの牧場 "Cow yard" から、その名が起つたといわれる。古い時代のアメリカのカレッジは、校庭をヤードと呼んでいたもので、一七七四年にプリンストンがヤードをキ

ャンパスと改稱して以來、他のカレッジは逐次これに習ひ、今はハーバードのみがヤードの名称を保存している。現在ヤードでは主としてアンダーグラヂュエイトの、すなわちハーバード・カレッジの教育が行なわれているが、総長とそのフェロウズ "fellows" の事務所があるマサチューセツ・ホールや、"Deans" の事務室を擁するユニバシティー・ホール、大学財政のセンターであるレーマン・ホールなどなどのシートでもあるので、ここがハーバードの文字通りの中心であると考えて差支えない。

ハーバードの伝統は「自由」の一語につきるといわれる。それは先づ第一に政治その他、外界の干渉または制約に対する「大学の自由」である。第二に「教育、研究の自由」である。真理を追及し、それを表現することを何者にも制約されない強い姿勢である。第三に「学生のための自由」である。ハーバードは温情主義ではない。しかし、最小の規制と、最大の自由を与えているとの確信に立っている。自由世界における自由の、賢明な実現手段は自由教育であるとハーバードは考へる。従つてハーバードの学生は、選択の自由を巾広く

あたえられる。課程を選択するために、どの科目へ集中するかを決定するために、課外活動の方向をえらぶために。

最小の規制とは、学生に与えられた自由が絶対ではないことを意味する。フレッシュマン (アンダーグラヂュエイト一年次) からシニア (同上四年次) まで、逐次その制限が段階的に増加する。それは広いカリキュラムの枠を設定し、そのなかで、学生が自由教育の真隨を、或いは責任のある生活態度の法則を、誤まつた自由の行使がなされないよう、十分に理解したかどうかを確認するための履修要件を漸次強化して行く方法である。

この考え方の基盤は四年間のカレッジ教育を単なる教養の増幅や、総合知識の涵養と考へないで、自由の精神を唯一の目標とした人間形成の到達と思考することにある。従つて一般教育の三系列において融合同科目 "Amalgamated Course" の多いことはハーバードがアメリカでも最高である。

なお右の外に、アドバイズ・システムがある。学部の正教員は必ず学生のアドバイザーを兼ねる。新入学生は登録と同時にアドバイザーを振り当てられ、少くとも年六回以上の

面接を受け、科目の選択と課外教育及び個人問題について話し合う。

講義の外に少数教育を達成するためチューリアル・システム “The tutorial system of instruction” が設けられている。これは、約五十年前、当時のアメリカ諸大学に率先して確立されたもので、講義中心の教育に対してまことに好ましい変化をもたらしたものである。二年次の初め、集中課程に入るとすぐに学生はチューターを割り当てられる。ただし若干の自然科学科目などチューター制に適しない科目は除かれる。チューターは授業補助者 “Teaching fellows”、これには Upper-classmen も起用される。から教授にいたるまで、いかなるランクの教員もこれに当らねばならない。教育は学資 “House” (カレッジ) の学生は全員寮に入る) において、週に一回または隔週、定期的に、チューターと一対一か、または一人対数人という形で行なわれる。二年次では五〜六人がもつとも多い。チューターの指導によって、独自の、相当余分の学習計画を持つことが出来る。それによって正規コースの科目を減らしても差支えない。さて授業の計画にまで話が深入りしたが、

「自由」を基調とした文化と教養を青年に浸透させる教育の在り方といったものを僅かでも理解していただきたいと考えたためである。

⑤ コロンビアとニューヨーク コロンビアの役割は「優越するための教育」である。優越 “Excellence” という言葉は高度の授業と知識の向上及び職能における傑出、並びに社会と国家を指導する力の涵養など、幅の広い意味を持つ。また現在と将来の時代における精神と肉体の要求に応え、これと歩みを同じくするための集団であること、それがニューヨーク・ユニバーシティの教育原理である。

自由主義と資本主義のメッカであるニューヨークの、巨大な二つの私立大学は、その教育方針を右のように定義する。前者は、その大学の教育の高さを誇り、そこはかたなきエリート意識が漂う。後者は新興国アメリカの教育と研究を背負って立つ意気を示す。

非常に対照的なこの二つの大学の輪郭をほんのちよっぴり。コロンビアは一七五四年、英国王ジョージ二世の勅命により王立コロンビア・カレッジとして創立された。現在教授組織として十五の学部 “Faculties” と七十五の学科 “Departments” を擁し、その上に立

つスクール、インスティテュート、カレッジ等は傍系を含めて三十三に達する。六四年度支出総額は五千六百万ドル (約二〇一億円) で、しかも学生数は一七、二八三名でしかない。(金額は連邦政府との契約による支出四千万円を除く)

ニューヨーク大学は一八三二年、十五名の先生と一〇八名の学生によって出発した。教授組織としては十四の学部 “Divisions” と七つの大学院 (Schools-graduated or professional) その他研究所等を持ち、四千八百名の教員と二千五百の講座、および、約四万の学生を擁する。六四年度支出総額は約七千万ドル (二五二億円) 連邦との契約関係を除く) に達するが、コロンビアと比較し非常に大衆性大学の傾向が強いように見受けられた。

ハーバードの思い出

十月十三日、ハーバードのワッツワース・ホール “Wadsworth Hall” で、歴史、教学、行政にわたる概論的な説明を聞き、有名なホリオーク・センターの医療厚生設備を見学した後、ここに留学中の浅香先生と落ち合うため一行と別れてヤードに残った。すでにメープ



ハーバード大学のヤード

ルの葉は色づき、ヤード一面黄金のヴェールをひろげる下で、これまた黄ばみ染めたローンに寝そべって、あるいは栗鼠の遊びに見とれ、あるいはメモリアル・チャーチの秋空を切る尖塔を仰ぎ見て過した一時間は、永久に忘れられない異境のファンタジアである。ひろいローンをかこんで、先きに述べた歴史的な建物や蔭をまとう古びた赤煉瓦のドミトリ

イが立ち並ぶふんい気は、ニューイングランドの昔をそのままに再現してくれた。メモリアル・チャーチではその礼拝堂の大きな壁面いっぱい、第一次及び第二次の大戦で、祖国のため戦没した校友と学生全員の氏名、クラス名及び年代と軍籍を彫ってその霊を慰めている。礼拝堂の裏にある記念像と慰霊の言葉も静かに美しく印象的であった。

浅香先生と共に訪れたエンチン・インスティテュートのペルゼル先生との物語り、植物博物館のガラスの花々、小林先生のガイドで見学したワイドナー・ライブラリーのグラデュエイト用の書庫とキャロル、いづれも楽しく、なつかしい思い出の一コマである。

*1 州立カリフォルニア大学は現在八つのキャンパスを持つている。学長“President”のオフィスのあるパークレイ・キャンパス（桑港から湾を東へ、車で約四〇分）及び南部分校のロスアンゼルス・キャンパスが最も大きく、両方で約五十万の学生を擁する。その他六つのキャンパスを広く州内に持ち、各キャンパスの統率者を“Chancellor”と呼ぶ。大きな学園である。

*2 “Honor code”は基本的には前述の学生基準を教学の実践面に適用するため一九二一年に規定されたものといわれる。従って特に試験において援助を与えたり、受けたりしてはならない、教室

の学習においても、レポートの準備においても、許されていない援助を受けてはならない。学習における誠実と責任が強調されるわけである。

*3 15 ハバードではアンダーグラデュエイトの課程（アドクリフ・カレッジ）において、一般教育の分散課程“Distribution or General Education”（原則として一、二、三年次で履）及び略併行して集中課程“Fields of Concentration”（二年次からはじめる）の二形式のカリキュラムを組む。いづれもきめの細いチュネトリアル授業を交えるが“Distribution”では人文、自然、社会の三系列にわたりひろく十六コースを学生の選択に委ね、“Concentration”では三二の分野を設けそのうち個性に適応する或る分野に努力を集中させるよう指導する。たとえば経済学において四つのフル・コース、人類学において六つのフル・コースというように。ただし後者の場合、複合的な方式もみとめている。たとえば“Classics and Fine Arts”や“Mathematics and Philosophy”とか。

融合科目とは、たとえば人文系列において“Epic and Drama”“Ideas of Man and the World in Western Thought” 社会系列において“Western Thought and Institutions”など。

ハバードの一年次“Freshman”二年次“Sophomore”三年次“Junior”四年次“Senior”この用語は公式または慣例として諸大学共通に使われる。

（帰学以来、入試と開講に追われてしまいました。七月の終りには「欧米諸大学の教学組織と制度」についてアルバイトをまよめたかと思つています）